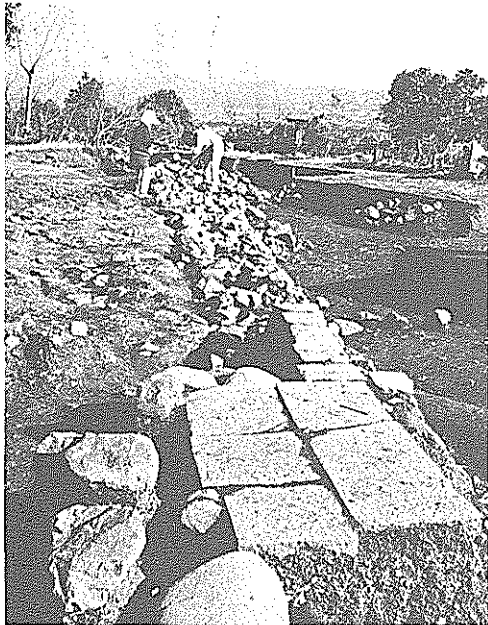


岡豊城跡
発掘調査

2層以上のやぐら跡発見

「天正3年銘入りがわら」も出土



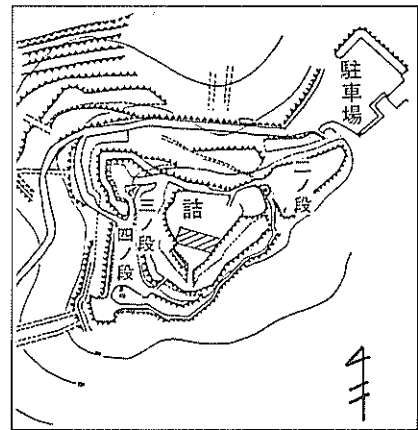
2層以上のやぐら跡と考えられる石組み遺構
(岡豊城跡詰ノ段南部分)

県教委が進めていた、歴史民俗史料館の建設に伴う「岡豊城跡」の第一次調査が終わり十二月二十二日、調査結果が発表されました。それによると、中世の山城としては大規模な二層以上の建物と思われる遺構を確認。また、元親が土佐を統一した「天正三年」の銘が入ったかわらも見つかり、不明な部分の多かった中世の山城を知る貴重な発見となっています。

今回の調査は、三年間にわたる継続調査の初年度で、詰(本丸)と二ノ段が対象。面積は三百平方メートルを四地区に分け、トレンチ方式で発掘し、遺構がよく検出された詰の南西部について、拡張し調査を実施しました。

発見された遺構は、櫓(やぐら)の礎石と石組み、出入口と思われる切り石と礎石、土塁など。特に、礎石と石組みをもつ遺構は、建造物(櫓)の基礎と考えら

れ、三十センチ程度の割り石を幅一・一・五尺、長さ十六尺に配し、規模は大きなもの。建造物は、位置的にも高知平野を一望できる地点で、方位も東西に真つすぐ延びています。特に石組みの中央部の礎石は、通し柱の可能性があり、二層以上の建造物であったと考え



られ、南側の石列は、軒下の雨落とし用と見られ、建物自体は東西十四メートルと想像されます。

石組み遺構の西端には、進んだ技術で作られた切り石遺構が見つかり、これは櫓に付随した出入口とみられます。

また、石組み遺構の下に焼土と炭化物の層が検出されました。これは、兼序の時代の岡豊城落城と

〔岡豊城〕

標高九十七尺の詰(本丸)を中心とした主要部、西南二百尺に位置する廊跡(うまやあと)、南方二百尺にある家老屋敷の三つの郭からなる連立式の山城。

築城は不明な点が多く、史上に出でくるのは兼序の時代。永正五年(一五〇八年)、兼序は本山・山田・吉良・大平の連合軍に攻めら

一致する可能性も強く、このことから、石組み遺構は國親の時期に建てられたと考えられます。出土遺物は、天正三年銘のかわら、渡来銭、石硯、茶うすなど約五千点。

特に、天正三年銘のかわらは、切り石遺構の北側で同じレベルで出土。天正三年は、元親が土佐を統一した年でもあり、遺構との関連が今後注目されます。また、岩盤をくりぬいた穴から、土師質土器の杯と共に多量の渡来銭が出土し、築城の際に地鎮の祭りが行われたものと思われま

この調査は、城跡の基礎資料と今後の史跡保存整備のための三年間にわたる継続調査で、来年度は詰で発見された石組み遺構を拡張、詰の東部約一・五尺低い部分の発掘などが予定されており、その成果が期待されています。

れ落城。兼序の子國親は、幡多の一家へ逃げ、成長し永正十五年岡豊に帰り再興に乗り出すが、途中一五六〇年病死した。

後を継いだ元親は、ついに天正三年(一五七五年)土佐を平定し、こえて天正十三年(一五八五年)には、四国を制圧したが、豊臣秀吉に敗れ、かろうじて土佐一國を保つことになる。天正十六年、城は大高坂(現高知城)に移された。